

海外研修報告書

財務課契約担当 小西 達也
学生・キャリア支援課 大野 矩子

【概要】

期間 平成 29 年 1 月 15 日（日）～1 月 22 日（日）
場所 クアラルンプール

【総括】

1. 語学研修

5 日間文法のクラスを受講し、特に助動詞の用法について学べた。授業は午前中に 2 時間、合計 10 時間で、語学研修としては少し短く感じた。午後に各教育機関でインタビューを行う予定があったので、その練習も兼ねてスピーキングやリスニングのクラスを受講できるとより良かった。

2. 大学視察

(1) MJIT

◇教職員へのインタビュー

・マレーシアでは、学生は先生と一対一で研究を進めていくので、先生の面倒見が良くなければあまり進まないこともある。日本式のグループワークを導入することで、先輩が後輩に教える環境もでき、効果を発揮している。MJIT では日本式の教育システムをもっと取り込みたいと考えており、人間力の育成、ものづくりの精神を習得することも目標の一つである。

・京都大学が今年から協定校に加わり、合計 27 校。2017 年度に提携は一旦終了するが、第 2 フェーズが始まることが決まっている。現在は研究費を日本、人件費をマレーシア政府が出しているが、今後は削減される方針。第 2 フェーズの資金提供元はまだ明らかにされておらず、研究費もいくら確保できるか分からないのが現状。

・MJIT に来ている筑波大学の先生方は研究休業中という扱いになり、科研費が出ない。現地から日本の物品を発注すると、納品まで時間がかかるため、研究分野によっては苦勞することも多い。インタビューを受けてくれた大学院生の一人は、研究に必要な設備が十分でない聞き、先生からの情報をもとに自分で部品を持ち込み現地で機材を組み立てた。

・マレーシアでは、早く結婚して子供産んで、子供を職場に連れてきたりしながら働き続ける女性が多い。女性の採用が近年増加している背景には、世界的な流れも含めていろんな要素がある

が、最初は専門分野を女子学生に指定し、就職させ、女性が有能だと職場で証明していったことで、女性の採用の門戸が少しずつ開かれていった。

- ・ダブルディグリーとジョイントディグリーについて、MJITとしては擦り合わせる必要がない前者が楽だが、後者の方が学生の費用を抑えられてより多くの教育機会提供につながる。

- ・留学生寮について。一泊100リンギット(約2700円)、収容人数は約20人、男女混合、滞在日数決まりなし、ゴハンなし。

- ・英語教育について、保育園から勉強を始めている。初等教育では英語の授業のみ英語を使用するが、他の科目は全部マレー語や中国語で行われる。国内では英語が使えれば日常生活が送れるので、母国語を忘れないよう、その言語の学校に行かせることが多い。一方、数年前に政府が、英語で行う科目を増やすよう指示し、数学等の理系科目が英語で行われるようになった。大学図書館の書物はほぼ全て英語で書かれているが、複数民族が存在するマレーシアで学問に関する使用言語を統一する方針のためだと思われる。

- ・入試。建築等の専門科目を除き、基本的には高校での成績評価で選出される。建築等、面接が行われるところもある。

- ・短期ステイで語学研修1週間+クアラルンプールの日本系オフィスで10日間インターンシップ等も可能である。特にマレーシアでは複数のカルチャーがミックスした環境を経験できるのが強みになる。またMJITは日本のコンソーシアム(27大学)にもマレーシアの大学のコンソーシアムとどちらも参加しているため、MJITを通じて他の大学等へ仲介することもでき、日本とマレーシアの架け橋になる役割を担っている。

- ・医学系や化学系や工学系の大学に進むと奨学金が出る。マレーシアでは7才、15才、17才と、3回、優秀な学生を選抜して理系に進めさせていくシステムがある。そのため、優秀な人材ほど理系に選抜されていく。女性は学歴がないと就職が有利にならないため、大学進学を希望する女性が多く、また進学先を決める際には奨学金が出る分野を選ぶことが多い。医学系は勉強年数が長いので、結果として工学系を選ぶ女性が多い。ある教員の方の印象としては工学系全体の30~40%が女性で、またMJITでいうとグループによっては7~9割を女性占める。よって、特に女子大との協力が必須というわけではないが、優秀な女子学生の受け入れ候補先は増やしていきたい。

- ・マレーシアの工学系大学はJABEEに則ることが必須になっており、JABEEの規定の中でインターンシップが必須になっている。マレーシアではインターンシップが日本よりも盛んで受け入れに協力してくれる企業が多い。インターンシップは3年次に平均で3ヶ月程度で、最低でも2週間は行われる。会社と大学の教員双方が学生を評価し、学生は日誌をつけて最後にレポートをまとめる。インターンシップの採用人数は特に決めておらず、会社の裁量で決まる。大学側がリストアップした企業を学生が選ぶが、その選出は、基本的に先着順。MJITの場合は、日本語の練習も兼ねてマレーシア内の日本系企業に行くことが多い。リストに載せる企業は、既存のコミュニティーへ出向いて相談して企業増加に努めている。

◇寮の視察

・寮の各棟ごとに職員が家族で住み込んでいて、オフィスが閉まる 17 時以降の夜間の間に何かあれば対応するようになっている。敷地内にはジム(曜日によって男女別で使用)やテニスコート、ミニシネマ、バトミントンコートなど、多様な設備を備えている。洗濯機は共同で、大学間を往復する直通バスも存在する。敷地前の守衛所にはガードマンがいるが、各棟への入口に見張りがあるわけではない。日中具合が悪い時は大学内のクリニックに行くが、夜間は寮内にクリニックを開いており、救急車も一台ある。全体として、設備がとても充実している印象を受けた。

・宿泊費は光熱水費込、2 人シェアで 1 日 8 リンギット (約 196 円)、1 人使用は 16 リンギット (約 392 円)。門限は午後 12 時である。

◇日本人留学生 3 名へのインタビュー

・マレーシアへの VISA 申請にはかなり時間がかかる。中には発行の遅れが原因で、渡航を先送りにしたり、空港で引き返す羽目にあった人もいたらしい。このような話は複数の留学生から聞いたので、留学支援の際は、学生により注意を呼びかけるべきかもしれない。

・海外留学先では、想定外のトラブルが起きやすいので、保険には必ず加入すべきとのこと。その学生は、夜中に食中毒を起こしたり、馬に腕を噛まれたことがあったが、いずれも 24 時間電話対応可能な保険のお陰ですぐに病院で手当てを受けることができた。

・授業の内容は、日本と比べてより実践的。定義や原理よりも、機材の使用法等に重点を置いている。マレーシアが産業の発展途中にあり、大学の存在意義として産業発展への貢献が多く含まれていることが要因かと思われる。

・MJIT を選んだ理由は、自分の専門分野が設置されていたこと (2 名) と指導を受けたい先生がいたから (1 名)。前者の 2 名は留学を通じて特に学力以外の部分で成長を感じた。見知らぬ土地に来ることで、適応力やコミュニケーション能力が磨かれ、視野も広げることができた。

・交換留学を行っているため、日本へ留学経験のある学生や留学希望の学生が優しく接してくれる。大学の授業は日本の高校のように 1 クラス 30 名程度で行われるため、非常に仲良くなれる。学校に限らず、マレーシアが親日的であるという評判は間違っていないらしい。

(2) クアラルンプール大学

◇教職員へインタビュー

・マラ財団の支援を受けており、教育は福祉の一環だというスタンスでやっている。教育の機会を提供し、貧困を改善して産業発展につなげていくのが目的。だから教育だけを見ておらず、その先、社会で通用する人材に重きを置き、設備は実験や実際に機械を扱う練習の機会を多く設け、講義 3 割、実技 7 割でやっている。また企業との連携が強く、その分野のスペシャリストを教員に採用している。

・2009年の留学生は3名だったが、現在は200名以上いる。青山学院大からの留学生は去年31人で今年は45人に増加している。

・イスラム社会がどんなマーケット市場になっているのか調査したい企業にとって、マレーシアはオープンで多民族、他宗教に寛容なので、サウジアラビアなどよりもイスラムマーケティングしやすい環境にある。

・授業や実習を通じて、世界にも通用する飛行機のメンテナンス等のライセンスが取れる。使わなくなった飛行機をメンテナンス実習に使わせてもらったり、実際に着陸した飛行機を整備しているところを見学させてもらいながら教えたり、実習ベースに力を入れている。

(3) MJHEP(マレーシア日本高等教育プログラム)

◇教職員にインタビュー

・現在393名の学生が在籍しており、その内117名が3月に来日予定。日本の23大学と提携している。学部生は教育、院生への支援は経済支援のみ行っている。行きたい大学は学生自身が選び、学生が大学に問い合わせして、大学からMJHEPに連絡が来て、話を進めていく。現在の派遣先は工学分野のみだが、いずれは環境学や鉄道技術の方面でも留学生を派遣することも検討している。教員は54人中18人が日本人。現地で採用された方は、いずれも日本に留学経験があり、学位を取っている。

・クアラルンプール大学を始め、国内6つの教育機関と提携している。というのもMJHEPでは教育はできるが、学位を出す資格がないので、その部分でクアラルンプール大学等に協力してもらっている。

・毎年8月に応募を受け付け、4000人の中から高校の成績と面接で総合的に審査し、選ばれし優秀な100人のみが合格する。そのため、留学先でも優秀な成果をあげている。男女比率はほぼ半分になるよう調整しているが、女性の方が概して優秀な傾向にある。

・留学先の大学はできるだけ分散させたいと考えている。留学の前提として奨学金が給付されることも条件だが、それでも日本の私立は学費が高い。相対的に日本の国立大はレベルが高いので、国立大との連携をもっと深め、国立大への派遣を増やしたいと望んでいる。

・受け入れ先には、スタッフが定期的にモニタリングしに行き、問題ないか視察するようにしている。視察の際は住居、イスラム対応のハラール料理が手に入る周辺環境であることを確認している。

・本学とは文教育の分野で、教職員の語学研修で協力し合えないかと興味を持っている。理系でない教職員たちに、日本語教育をレベルアップさせるチャンスを与えたい。提携のスタイルはコンソーシアムでなく、1大学ずつと個別に行っているため、提携はしやすいと思われる。

・留学から戻った学生は、その後の調査はするが特に支援はしていない。MJHEPの目的は、学位をとることではなく、その後のキャリアにある。日本の大学卒業後、職業経験を2~3年積んでから帰ってきてもらえると、マレーシアでとても良いキャリアとみなされる。

・留学先では日本語で授業を受け、むしろ日本語の習得をして武器を増やしてほしいので、英語で行う授業があるかは問題ではない。そのため、日本語教育はとても力を入れ、厳しく行っている。

(4) マラヤ大学

◇キャンパス内を見学

・キャンパス内のバリアフリー化に対する取り組みについて、話を聞くことができた。寮には、障害者専用の部屋やトイレ、洗濯機が設置されており、障害者同士のルームシェアも行っている。